〔1398〕

氏名（生年月日）	劉（リュウ）　蕾（ワイ）　（1990 年 4 月 22 日）
学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	文博甲第 148 号
学位授与の日付	2022 年 3 月 16 日
学位授与の要件	中央大学学位規則第 4 条第 1 項
学 位 論 文 題 目	**中国内陸部貧困地域における親の教育戦略に関する実証研究** **―公立高校間格差と社会関係資本の役割に着目して―**
論 文 審 査 委 員	主査　古賀　正義
	副査　森茂　岳雄・眞鍋　倫子・加野　芳正

内容の要旨及び審査の結果

1. 本論文の目的と構成

中国の高校教育は、大学への予備選抜的な性質を強く持ち、生徒を選抜する機能を持っている（張 2021 など）。とりわけ 1950 年代以降、一部の都市に公立の重点高校を設ける「重点学校政策」が実施され、大学進学率が上昇するなかで、重点高校が重点大学へのエスカレーター装置となった。その一方で、非重点高校は教育資源が窮乏し、学校教育の水準が著しく低下した。いわば重点高校への進学は、生徒の将来の社会的成功につながっているといえる。

学歴社会の中国において、特に経済が遅れた地方貧困地域の人々にとって、高学歴の取得は上層移動に最も有効な手段とされる。その結果、学歴競争が激しくなると同時に、教育の市場化を伴う親の選択肢の拡大が進み、子どもを進学競争に勝ち抜かせるため、親はさまざまな教育戦略を駆使することになる。つまり、親の戦略が子どもの進学を左右するという「ペアレントクラシー」（Brown 1997）が強まっている。

顕著な事例として、重点高校では「択校生」という特別募集枠制度による入学が認められている。一定範囲で入学点数の不足した生徒に対して、親が特別な上納金を納入することによって、高校側が入学を許可する制度であり、中国全土で実施されている。「択校生」制度の基準は公的には明文化されておらず曖昧であるため、単にお金が出せるという親の経済力によってすべてが決まるわけではない。

この制度の利用を促す教育の仕組みに関する情報や教育関連の有力者とのコネクションなど、親の所有している「社会関係資本」の影響が大きいとみられる。ここでいう社会関係資本とは、人々の関係から創出される利益の総称であり、他の資本形態（経済資本や文化資本など）と異なる。中国人社会学者リンによれば、「行為者間の相互関係の構造に内在し、行為者が社会ネットワークを通じて獲得できる資源である」と定義される（Lin 2001）。

実際中国社会では、子どもの教育に関して、親の社会ネットワークから生み出された人脈や情報、コネクションが大きな役割を演じてきた。例えば、親は教育関係者や教師、親相互のネットワークから情報やコネを構成し、利用可能な教育の戦略（詳細は後述するが、例えば推薦入試や特別入試枠、自主学生募集など大学入試の優遇諸制度）を探し出す。いいかえれば、親が所有する社会関係資本を使って、さまざまな進学制度を活用し、子どもの進学機会を左右することができる。

中国では、日本のような受験生と保護者のための大学進学や入試情報を提供する高校側の進学相談会などが設けられていない。加えて、高校側は教育の実践でも受験指導を重視しており、親も生徒の成績で教師の指導能力を評価する。この結果、教師は親と進学の相談や懇談はせず、担当生徒全体の成績が上がることに力を入れる。それゆえ親は、教師や学校あるいは地域の教育関係者に、進学に関する情報や進学の戦略について聞きだすしか方法がないといえ、進学の結果は親しだいになりやすい。

従って、社会関係資本を多く有している親ほど、豊富な教育情報を入手して子どもに多様な教育機会を提供できる一方で、社会関係資本が欠如する親は、子どもに豊富な教育機会を提供できなくなっている。すなわち、親が所有する社会関係資本の多寡により、子どもの教育機会とりわけ進学機会の不平等や格差が生じてしまう。

以上の問題意識に基づいて、本論文では、中国内陸部の貧困地域を取り上げ、社会関係資本の理論的論考などを参照しながら、高校間格差（重点校／非重点校）と親の教育戦略の関係に着目し分析する。その際、親の社会関係資本が、進学機会の獲得にどのようなはたらきをしているかを進学制度の活用事例やネットワーク構築過程を通して具体的に検討し、進学機会の不平等・格差を加速させている高校現場の実態とそのメカニズムを実証的に分析していく。

2. 本論文の要旨

本論文は２つの部分に分けられる。第Ⅰ部は、中国の社会構造や教育政策の特質を考察したうえで、その社会構造に埋め込まれた社会関係資本が親の教育戦略にどのような影響をもたらしているのかについて理論的背景を検討する。第Ⅱ部では、第Ⅰ部の研究結果を踏まえ、中国の地方貧困地域を事例に、進学機会の不平等に影響する教育政策の直接的な効果と親の教育戦略選択の迂回的な効果双方に焦点にあて、インタビュー・観察等による実証的な研究を行う。

各章の構成は以下である。

序章　問題の所在と本研究の構造

　第１節　本研究の問題意識

　第２節　先行研究のレビューと課題設定

　第３節　本研究の枠組みと論文の構成

第Ⅰ部　中国の社会構造と進学機会の不平等

第１章　重点学校政策と公立高校間格差

　第１節　重点学校政策の実施とマンパワー論

第２節　重点学校政策の歴史的展開と公立高校間格差
第３節　効率原理による教育資源の傾斜的配分
第４節　本章のまとめ
第２章　戸籍制度と進学機会の制約
第１節　中国における特有な戸籍制度の概念
第２節　戸籍所在地と社会空間等級の形成
第３節　現在の中国における戸籍の移転とその障壁
第４節　本章のまとめ
第３章　中国における社会構造と社会関係資本の偏在
第１節　社会構造と愛国主義教育
第２節　社会ネットワークのあり方と資本の創出
第３節　社会構造における社会関係資本の偏在
第４節　本章のまとめ
第４章　社会関係資本を活かした親の教育戦略
第１節　教育行政の地方分権と公教育の市場化
第２節　社会関係資本の教育効果と進学機会の不平等
第３節　進学に対する親の教育戦略と社会関係資本の連関
第４節　本章のまとめ
第Ⅱ部　中国内陸部貧困地域江西省の調査事例から
第５章　高校間格差と入学機会の不平等の構造
第１節　調査地域の概況と教育システムの構成
第２節　教育資源と大学合格率からみる高校間格差の実際
第３節　高校ランクによる生徒の社会的属性と進学機会の不平等
第４節　本章のまとめ
第６章　高校間格差を意識した親の教育戦略の事例研究
第１節　本調査の対象と研究方法について
第２節　「択校生」制度の利用者と非利用者の理由
第３節　社会関係資本の多寡による「択校生」制度の利用
第４節　本章のまとめ
第７章　高校在学時のコミュニティと社会関係資本の構築
第１節　本調査の対象と研究方法について
第２節　保護者会の風景から見る親のネットワークのあり方
第３節　インタビューから見る親のネットワークの形成
第４節　本章のまとめ
第８章　高校卒業時の教育戦略と社会関係資本の影響

第１節　大学進学に対する親の多様な教育戦略

第２節　多様な教育戦略と豊富な社会関係資本

第３節　教育戦略の取り組みができない現実

第４節　本章のまとめ

終章　全体のまとめと今後の課題

第１節　全体のまとめ

第２節　今後の課題

各章の概要は以下のようにまとめられる。

序章では、本論文の研究目的と課題設定を提示した。いままでの中国における教育機会の不平等に関する研究は、マクロな階層的分析による量的な実証研究が主流であり、ミクロな親の教育戦略（ペアレントクラシー）などにあまり注意を払ってこなかった。進学機会の格差が、社会的ネットワークに連動して生み出されていることも、利害が関係するという経験値としてしか理解されてこなかった。

中国では、日本と異なり、塾などの学校外教育機関の利用にかかわる親の教育戦略は見られにくく、親による進学する学校の選択とそこに進むためのさまざまなフォローアップ（進学資金の調達など）が親の「教育戦略」の中核であるといえる。そこで、本稿の課題は、社会関係資本による親の教育戦略が子どもの具体的な進学機会の獲得にどのような影響を及ぼすかを検討することである。

第１章では、中国における重点学校政策が打ち出された社会背景とその展開、およびその過程において生じた高校間格差問題を解明した。後発国としての中国は、先進国に追いついて近代化を実現するために、人材育成・人的資本を目的とした学校教育を重視した。そのため、限られる教育資源で効率的にエリート人材を育成するため、国家戦略としての重点学校政策が打ち出された。

重点学校政策は、より早く優秀な人材を育成するため、限られた教育資源を一部の学校に集中的に配分することである。こうした教育資源の傾斜的配分が行われたことで、高校間の格差が深刻化し、進学機会の不平等問題を引き起こしている。

第２章では、中国における進学機会の不平等に関わる戸籍制度を概観し、それと進学機会の関係を解明した。特有な戸籍制度により、各個人はその居住地域において農業戸籍（農村戸籍）と非農業戸籍（都市戸籍）という２つの戸籍身分にそれぞれ登録される。戸籍制度は、教育、医療、就労および社会福祉など様々な制度と連動しており、国民の社会的立場に大きな影響を与えてきた。そのため、都市と農村が分離され、地域間の格差問題が深刻化してきた。

また、同じ種類の戸籍であっても、戸籍所在地（戸籍上で登録される出身地）の都市ランクに応じた等級性が存在している。戸籍所在地が直接的に初等、中等ひいては高等教育の進学機会に大きく影響していく。すなわち、進学機会は教育資源の地域的偏りや戸籍所在地によって不均等に配分されている。

第３章では、中国の社会構造の特徴を説明したうえで、親の教育戦略に影響を及ぼす社会関係資本のあり方と獲得の方法を考察し、社会関係資本の不平等を検討した。中国社会では、秩序の創出

と維持は少数の権力者と国家組織によって行われやすい。そのため、資源配分の過程で個々人の権力性が重視されることになる。

異なる社会的集団に属する行為者（ここでは、親）は、構造的地位や社会ネットワークにおいて有利・不利があるので、社会関係資本へのアクセスには格差が存在する。理論的にみれば、社会関係資本は行為者間の相互関係の構造に内在し、行為者が見返りを期待した社会関係に対する投資を通じて獲得できる資源であるといえる。社会関係資本へのアクセスに影響を与える要因は、行為者本人のポジション、本人と他行為者との間に結ばれる紐帯の性質、ネットワークにおける紐帯の位置の三つにまとめられる。

第４章では、教育行政の地方分権と公教育の市場化を説明したうえで、子どもの進学に対する親の教育戦略における社会関係資本の役割を検討した。改革開放の実施や社会経済制度の改革に伴い、教育体制の変革が行われてきた。その結果、教育の権限は高度な中央集権制から地方政府責任制へと変わり、地方政府と学校の自主裁量権が拡大するようになった。そこで、高校段階では、重点高校が良質な教育資源を確保する資金源として、「択校生」制度が始められた。他方、大学段階では、入試制度改革により、自主募集制度、推薦入学制度、特別な分野における単独募集枠の設定など多様な選抜方式が導入された。

高校入試で「択校生」制度を利用して重点高校に進学したい場合に、「択校生」を利用できるかどうかを決める権力者とのネットワークが大きな役割を演じる。それに比べて、大学進学時の教育戦略は多様化・複雑化している。大学進学に対する教育戦略の取り組みを実現するためには、進学に関する有利な情報を獲得できる効果的なネットワークの構築が改めて求められる。つまり、社会関係資本は情報の取集を促す効果と、重要な役割を担う組織のエージェントに影響を及ぼす効果との両面がある。

第Ⅱ部となる第５章では、中国内陸部貧困地域の江西省Ｋ市を事例にして、教育資源と大学進学率という２つの視点から高校間格差の実態を考察した。重点高校と非重点高校における生徒の社会的属性の差異と大学進学機会の不平等に関して（公表されている公的データは限られているため）アンケート調査などをもとに検討した。重点学校政策による教育資源の傾斜的配分が行われたことで、教育にかかわる物的資源と人的資源の格差から、大学合格率に現れる高校間の格差も深刻化していることが明らかになった。

また、高校ランクによる生徒の社会的属性の構成から見ると、Ｋ重点高校とＪ非重点高校の間に大きな階層差が存在している。それゆえ、高校の入学選抜の過程において、成績という業績原理以前に、出身戸籍という属性原理も影響しているとみられ、生徒の社会的属性による差異は大きいといえる。特に「択校生」からの進学ルートでは、都市戸籍を持っている生徒がほぼこのルートを独占している。つまり、生徒の社会的属性により重点高校への進学機会が異なっており、明らかに平等ではなくなっていた。

第６章では、中国内陸部貧困地域のＫ重点高校における「択校生」制度の利用に関する親の教育戦略を事例として、社会関係資本の格差による子どもの高校進学機会の不平等を検討した。そのた

め、高校生を持つ親たちへのインタビュー調査を実施し、そのデータを用いた。

「択校生」制度の利用においては、親にかかわる家族や親族などの強いネットワークに埋め込まれた社会関係資本が重要な役割を果たしたことが示された。親の語りからは、制度の利用が、情報の収集とコネの利用であることが明瞭に語られている。他方、社会関係資本が欠如している親は、進学先の選択を子ども自身に任せる傾向が強い。これは、「択校生」制度を利用しない選択というよりも、「択校生」制度を利用できない現状にあると言ったほうが適切である。つまり、社会関係資本につながる特殊な進学制度によって、子どもの進学機会は親が持つ社会関係資本に左右されている。

第 7 章では、K 重点高校と J 非重点高校に進学した生徒の親たちそれぞれにインタビューするとともに、両校で親の集まる会合などでの観察調査を行い、それに基づいて論述している。高校入学から卒業までの間に形成される親のネットワーク（親同士のネットワークや親と教師とのネットワーク）に注目して、社会関係資本の獲得を検討した。

親のネットワーク形成は、高校在学時のコミュニティの違いにより異なる。K 重点高校では K 市出身の親に限定される親グループが存在し、閉鎖的な親同士ネットワークを形成していた。出身戸籍の異なる親は介入できない。一方、J 非重点高校における多くの親は農村地域に分散しており、普段顔を合わせる機会は乏しい。そのため、親同士間のネットワークを築くのが困難な状態であった。

さらに K 重点高校における K 市出身の親は、所有する権力を利用して教師に生活の利便を提供することによって、教師と緊密なネットワークを維持していた。少数の J 県出身の親も、積極的に教師とのネットワークを形成しようとするが、同じ地域で暮らした経験がないため、緊密なネットワークを作るのが難しくなっていた。他方、J 非重点高校における農村部出身の親は、身分相応の意識があり、教師との交流に回避的な態度を持っていた。また、教師も親の教育期待に応えないため、仮に都市部出身の親であっても、教師とのネットワークを作ることに対して消極的であった。

第 8 章では、K 重点高校と J 非重点高校に進学した生徒の親たちへのインタビューに基づき、高校在学時に形成された親のネットワークが子どもの卒業時の大学進学に対してどのような影響を与えるかを検討した。結果からいえば、子どもの大学進学に対する教育戦略の形成にも親のネットワークが影響しているといえた。

親のネットワークの違いが教育戦略の選択に関連していることはデータからも明らかであった。具体的にいえば、K 重点高校の親たちは、子どもを重点大学に進学させるという明確な目標を持っていた。その目標を実現するために、親のネットワークから豊富な情報を獲得して、多様な教育戦略に関する認識を取り込んでいる。他方、J 非重点高校の親も、子どもをレベルの高い大学に進学させたいと欲しているが、現実的には親のネットワークからの具体的な情報取集や支援を得ることができず、大学進学に対する教育戦略を構築することができない。このように、高校ランクによる親のネットワークの格差は、教育戦略の形成を媒介とし、大学進学機会の不平等にまで影響を与えた。

終章では、以上の各章での考察から得られた結論を示し、その理論的インプリケーションを明らかにするとともに、本研究の残された課題を提示した。

本論文の分析を通して、以下のような知見を考察することができた。

第一に、今日、中国の進学機会は、市場型のメカニズムをとりながらも、上納金による進学のチャンスや戸籍による進学のチャンスなどが存在し、国家制度や教育政策の影響を受けつつ、階層間格差を伴って構築されていると結論付けられる。進学機会の平等化を促すには、まず学校格差を拡大した重点高校政策から再検討する必要がある。

第二に、親の教育戦略の取り組みにおいて、生徒の学力への文化資本の影響あるいは勉学の援助への経済資本の影響だけではなく、地域社会でのとりわけ有力な教育関係者との社会ネットワークの構築・維持とそれに由来する社会関係資本の重要な役割を理解する必要がある。言いかえれば、社会関係資本が豊かな家庭・親が、新たな「ペアレントクラシー」（Brown 1997）の時代に有利な立場に置かれているといえる。

第三に、本研究で調査事例として取り上げたのは、経済発展が遅れた内陸部貧困地域の都市であった。中国では地域間の経済や教育格差が非常に大きく、教育戦略を取り組む社会経済的文脈は必ずしも同じではない。こうした地域間の格差をも視野に入れ、地域ごとの親の教育戦略を比較すること、さらにはそこでの社会関係資本の影響を理解することは今後の大きな課題の一つとなる。

3. 本論文への評価

本論文はいくつかの点で重要な意義を有している。

まず、本論文の独創性は、中国における特有の社会制度・教育政策の下、高校生の教育機会・進学機会に関して、親の階層に伴う経済資本や文化資本などの影響と異なり、地域社会の人間関係・ネットワークおよびそれに由来する社会関係資本の獲得が親の教育戦略の選択と関連し、大きな影響を与えていることを明らかにした点にあるといえる。

これまでの研究ではマクロな階層構造が生徒の進学機会を規定していることは大規模データから明らかにされていた。だが、その関連性が現実の地域社会でどのように構築され維持されているのかにまで踏み込んだ分析は十分でなかった。とりわけ、生徒の教育達成・学力形成に親の経済力や文化性が直接的な影響を与えるという階層再生産の認識が強かったため、生徒の進学機会そのものの親による選択過程（中国における「教育戦略」の選択）には十分目が向けられてこなかった。

しかしながら、「択校生制度」という、入試点数が幾分か低くても重点高校に入学できる上納金の制度とその利用の有無という点から進学機会を再度検討しなおしてみると、地域社会の中で、親が進学機会を選択するのかあるいは選択できるのか否かが実際の生徒の進学先を大きく左右することがわかった。いくら階層的に優位な親でも、つまり経済資本も文化資本も豊かな親であっても、「択校生制度」といった教育の優遇制度にかかわる情報を持っていなければ、あるいはその制度の利用を左右する教育の有力者（地域の権力者や教師など）との接触がなければ、進学機会を獲得することはできない。いいかえれば、親の社会関係・ネットワークの広がりとそこからもたらされる情

報やコネなどの「社会関係資本」がなければ、生徒の進学機会は開かれないことになる。同じ階層であっても、社会関係資本がある親とない親とでは、実際の生徒の進学チャンスが変わり、進学機会が制約されることになっている。

こうしたミクロな視点からの、生徒の進学機会と親の社会関係資本との関連を見ていくと、階層と教育・地位達成の連関メカニズムを支える新たな社会関係資本の存在の重要性が浮かび上がってくる。ここでは、よりよい進学先（重点高校、重点大学）を求める生徒とそれを支える親の社会関係資本の戦略的な有効利用のメカニズムが、結果的に、都市出身の高い階層の親において有利な生徒の進学状況・教育達成を構築させていくことがわかり、階層の維持のスループット過程が浮き彫りになっているといえる。

すなわち、「択校生制度」という切り口から、中国社会の進学機会の不平等を抉り出している点で、単純な階層の再生産論とは違った地域社会のネットワークに力点を置いた新たな教育の問題性を提起しているといえ、これまでにない中国社会における中等教育の意味づけとなっている。ちなみに、日本では中国の高等教育論に比して中等教育を扱う論考が少ないだけに、こうした新たな視点からの提案は極めて有益であるといえる。

次に、こうした地域や学校内での親の教育戦略を描き出すにあたって、インタビューや参与観察などの手堅いフィールドワークの積み重ねから実証していることも指摘しておきたい。

従来中国の階層・進学研究においては、マクロなアンケート調査のデータあるいは国レベルでの数量的な実態把握のデータなどによる分析がほとんどであった。しかも一部の研究者に限られた利用可能な部分的データの報告になりやすく、今回の調査においても、全国的な重点高校と非重点高校の入学生徒の階層比較データや進学先比較データの多くが公開されていない状況にあった。

特に第Ⅱ部の各章で記述されている高校教育の実態は、そのほとんどが筆者による独自なフィールドワークの成果として記述されたものである。出身地である地方貧困地域（江西省の各地域）に足を運び、学校や行政府の協力をえて、高校等でのアンケートやインタビューなどを次々に実施して、一次データを獲得していったのである。その精力的な研究姿勢によって、これまで確認できず経験値としてしか語られなかった事実が掘り起こされている。

具体的には、5 章で、高校入学生徒の出身地域や合格点数、進学先など、特に重点高校と非重点高校での差異、「択校生制度」利用者の概況といった点から、アンケート調査を用いながら数値として整理している。このデータそのものが、ほとんど公表されてこなかったデータであり、当事者の生徒への調査を介してこうした実態を全体的に把握していることが、その後の特定高校での質的な調査研究、事例調査の意義を増しているといえる。

次の 6 章から 8 章では、入学時－在学時－大学進学時という進路選択の 3 時点を区切って、親の時点時点での対応やネットワーク形成、戦略の選択を、高校生の進路選択の時間変化に応じた聞き取りや観察から描き出していて、意義深い。ここでも、広い階層の親を調査対象にすべく、筆者の地元の地域・高校で調査エントリーに励んだ成果が現れている。

例えば、入学時には中学時代から残存する親のネットワークが、高校ランクに応じて分化してい

ることが生々しい聞き取りから説明されている。日本の親に比べて、直接的な語り方をする親が多く、社会関係の資源の重みを感じ取れるインタビューになっている。また、在学時の章では、親の集まる会合の機会などをとらえて、ネットワークの実際を観察調査からみている。同じような属性を抱える親同士が重点高校で集う様子は、まさに進学戦略の源泉に踏み込むデータである。最後の、大学進学時には、さらに進学の戦略をめぐって、親と教師・有力者との積極的な情報交換やコネづくりが描かれ、驚かされもする。教師への接遇や贈与は、日本ではとても考えられないことであるが、懇談会や相談会など日本での当たり前の進学対応が、東アジア諸国ではむしろ特異であることを改めて感じてしまう。

「択校生制度」は、日本の教育風土からみれば、上納金による裏口的な入学方法にみえるかもしれないが、そうではなく、高校の運営経費を捻出し高校に親和的な親・生徒を集める一つの制度であって、公的な正当性を有している。そのことは、親や地域住民らも理解しており、入学情報の偏在やコネの力に対しても国の一連の施策として受容している。こうした中国社会ならでは社会状況や階層格差が、この制度を制度足らしめていることは、この具体的な質的調査の結果を通して、銘記しておきたいところである。さらにいえば、コロナ禍がなければ、もっと詳しい調査が可能であり、深い分析もできたであろうことは残念でもある。

以上、大きく社会関係資本からの分析視点のユニークさと、主に質的な実証研究に裏付けられた具体的な事例分析によって、本論文の価値は学術上非常に高いものになっていると、審査委員全員一致で判断した。

4. 本論文の課題

しかしながら本論文には、筆者が日本語ネイティブでないことからくる表現上の困難やコロナ禍での理論・実証研究の実施困難などを前提とした、研究上の課題がいくつかの点で散見される。

第１に、「社会関係資本」に関する理論的検討の不十分さである。

ここでは、主に中国人社会学者ナン・リンによる社会関係・ネットワークの分析理論を援用している。そもそもリンは、中国を含む国際比較研究によって、社会関係資本の利用の一般性を証明しようとした。その点で、本研究に直接的なインプリケーションをもたらしてはいるが、限られたネットワーク分析理論だけから検討を加えるのは不十分である。すでに、ネットワーク論の野沢らが著名な論考のリーディングスで指摘しているように、進学機会や教育達成にかかわる社会関係資本の理論あるいはネットワーク分析の方法論の蓄積は数多くあり、今後さらに理論的な背景を深く探求する必要があるといえる。

第２に、「フィールドワーク」の方法的検討や実施事例の制約がある。

ここでは、親の地域・学校ネットワークを分析するために、参加観察やインタビューの手法を利用している。質的調査方法には、理論的な背景によって、分析の対象に関するデータ把握のルールや、利用する発話データの分析の規則などいくつか押さえておくべき研究上の約定があるといえる。だが、ここでは調査の可能な範囲で任意にデータを取得する形式になっており、データの信頼性あ

るいは恣意性が不安視されるところが少なからずある。調査方法と対象・データの性格に関する一層の探求が求められる。

第3に、限定された地方地域での実証による「知見の一般化」の限界がある。

ここでは、地方貧困地域が調査のフィールドとなっている。いいかえれば、筆者の地元地域の教育状況に関する経験的な知識をベースとして、社会関係資本の優位を論じている。だが、大都市部ではより細分化した高校ランクがあり、学校外の教育の多様性（通信教育や補習授業など）も存在してくる。親の教育戦略が多様になるなかで、今回の「択校生制度」にみられるような進学の戦略的対応と異なる社会関係資本の利用もあるだろう。限定された地域の問題なのか、教育の市場化を伴う中国全土の問題なのかを再度検証することが必要になってくる。この点で、一つの地域研究の限界を乗り越えるより幅広い対象による調査が求められている。

以上3点は基本的な研究課題であり、今後のさらなる研究が必要であるが、こうした点を踏まえても、本研究の価値は決して低められるものではなく、博士学位にふさわしい論文であるといえる。

5. 結論

以上の点を総合的に考えあわせた結果、審査委員は本論文が研究史的に大きな意義を持つことを認め、全員一致で本論文に博士（教育学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。